

知って役立つ発達心理学

渡辺弥生

Yayoi Watanabe

(法政大学教授)

第③回 子どもたちが思う「ずるい!」とは

子どもたちの学校での様子を見ていると、「ずるいぞ!」「ずるくないよ!」という言い合いを耳にすることがあります。モノを分ける、道具を使う、係や役割をめぐって、きまりを守ったかどうか、時には、先生の方針について、「ずるい」「ひいきだ」といった判断を声高に主張します。いったい子どもたちは、どんな場合を「ずるい」と判断するのでしょうか。特に、モノを分け合ったり、役割を分担したりするような、分配に関する正義は、分配的正義 (Distributive Justice) とよばれています。

公正観の発達

分配的正義についての認識は、子どもの成長とともに発達すると考えられています。ところが大人は、こうした子どもの認識をあまり考慮せず、つい慣習的に正解を与えようとするところがあります。一つしかモノがないとき、二人が存在していれば、そのモノを半分にして、「さあ、半分ずつにしたから喧嘩しないように」といった解決法です。

しかし、子どもたちの判断は、必ずしも大人と一致するわけではありません。

小学校低学年は、利己的欲求が強い時期なので、誰もが自分に多くしたいと考えます。「自分のほうが体が大きいから」などと、いろいろな理由をつけて「利己的分配」を主張します。そのうち、「絶対同じがいい!」という「均等分配」を求めるようになります。理由を尋ねると、「そのほうが喧嘩しないから」と答えます。

中学年を過ぎると、「がんばった人に、よりたくさんあげてもいい」という、貢献度に応じた「公平分配」を望む子どもが出てきます。高学年以上になると、「必要としている人に、より多くあげてもいい」と、個々が置かれている状況や立場を考えることができるよう



になります。さらには、相手に多くあげる「愛他的分配」ができる子も登場してきます。

子どもに理由を考えさせてみよう

こうしたモノやコトの分配を、誰にとっても公平だと思えるように話し合い、生活の中で解決していく機会を与えることは、子どもたちの認識を豊かなものにしていきます。大人が一方的に、あるいは慣習的に「はい、喧嘩しないように半分ね」「はい、順番ね」という単純な解決法を示してしまうと、大人が思う以上に「ずるい!」という不満をもたせるかもしれません。

例えば、コンテストで、どんなにがんばっても、他の子と同じ参加賞をあげるほうがいいのか、貢献度に応じて賞を変えるほうがいいのか。子どもたちの意見に耳を傾けることは、子どもの公正観の発達を知ることになり、また、子どもが納得のいく解決のプロセスを考えるきっかけをつくることになります。

渡辺弥生 ●わたなべ やよい

発達心理学、教育学博士。法政大学文学部教授。著書に『感情の正体——発達心理学で気持ちをマネジメントする』(筑摩書房)、『子どもの「10歳の壁」とは何か? 乗り越えるための発達心理学』(光文社)など。監修に『まんがでわかる発達心理学』(講談社)など。光村図書小・中学校「道徳」教科書編集委員。